

私を育てた  
あの時代、あの出会い

第10回

# 子どもを自らの学びに導く 教材開発の神髄を教えてくれた

新潟県 妙高市立新井小学校校長 西山義則 NISHIYAMA YOSHINORI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、西山校長が語る。

研究授業で出会った  
「緑のダム」が私を変えた

驚き、感動し、発見することです

どもは自ら学びに向かうのであり、そのための単元開発や教材研究が重要だ——。私は、小林毅夫先生の研究授業でそのことをまざまざと感じさせられました。

私は、中学時代の社会科教師に憧れて教師になりました。その先生の授業は、単に知識を与えるのではなく、生徒と先生が一緒に考え、つくり上げていくものでした。私はそうした授業をするには、子どもにとつ

て身近で、かつ教える価値のある題材を探すことが重要だと考え、新採の時からずっと教材研究に力を入れてきました。

しかし、30代になり授業も学級運営も一通り出来るようになると、「このままでいいのか」と自問するようになっていました。そんな時、上越教育大附属小学校から研究授業の案内が届き、「緑のダム、白いダム」という単元名に引かれ、小林先生の授業を参観したのです。

教室に入ると、教壇の横にある幅1メートルもある四角い水槽に、私の目は引き付けられました。中は泥や砂、



にしやま・よしのり 専門教科は社会。長岡市立中島小学校、上越市立大町小学校、上越教育大附属小学校、上越市教育委員会学校教育課課長などを経て、2011年度から現職。

1976 (昭和51)

新採として  
松之山町立  
(現十日町市立)  
松里小学校に赴任



松里小学校に  
新採として赴任した  
当時の授業風景

1988 (昭和63)

上越教育大  
附属小学校に赴任

1994 (平成6)

十日町市立下条小学校に  
教頭として赴任

2000 (平成12)

羽茂町立 (現佐渡市立)  
羽茂小学校に  
校長として赴任

2004 (平成16)

上越市教育委員会  
学校教育課副課長  
(後に課長)に着任

2008 (平成20)

上越市立春日小学校に  
赴任

2011 (平成23)

妙高市立新井小学校に  
赴任

## 「発見や疑問を引き出す授業の 大切さを伝えていきたい」



石が何層も重なり、表面はコケのよ  
うなもので覆われ、木が植えられ、  
端には蛇口が付いていました。ミニ  
山林が作られていたのです。

授業が始まると、先生はまず水槽  
にじょうろで水をたっぶりかけまし  
た。「何が起ころのか」と、子どもも  
参観者も皆、不思議に思いましたが  
何も起きません。そのまま授業は進  
みました。そして授業が終わる頃、  
蛇口から水がぼたぼたと落ち始めた  
のです。緑のダムとは森林の保水機

能を指し、水槽はそれを納得感を  
もって子どもが学べるように作られ  
た教材だったのです。

教室の中に水槽を使って森林を再  
現するという発想と、それを実際に  
作り上げた先生のエネルギー。自分  
の教材開発はまだまだであることを  
思い知らされました。それから、私  
は小林先生の授業に少しでも近付き  
たいと思い、何度も研究授業を参観  
したので。

教材研究の重要性に改めて目覚め

た頃、思い切った単元開発に挑戦で  
きる機会が訪れました。当時の勤務  
校では、柳澤正喜教頭から「やりた  
いことを好きなようにやりなさい」  
と言われ、厳しくも、教師の思いを  
実現しやすい環境にありました。6  
学年担任だった私は学年で話し合  
い、谷川俊太郎の詩「生きる」を起  
点に「生きること」を考える活動を  
1年掛けて展開しました。

子どもから「生きるとは食べるこ  
とだ」と意見が挙がったのを機に、  
畑を開墾して野菜を作り、収穫物だ  
けで夏休みにサバイバルキャンプを  
しました。子どもが自ら火をおこ  
し、器も土を焼いて作りました。ま  
た、「生きることは食することだけ  
ではない。心が大切だ」と生き方に  
目を向けるようになると、子どもは  
自ら話を聞きたい人を探し、近所の  
人や障がいのある人などに生き方を  
尋ねに行きました。1年間、生きる  
ことに真剣に向き合い、最後の授業  
では一人ひとりが「生きる」という  
タイトルで詩を書けるようになって  
いました。子どもは自分が生きてい  
る意味を考え、自らその答えを追い  
求めるようになっていたのです。

柳澤教頭の言葉と後押しがなけれ

ば、私たちにはこのような授業はで  
きませんでした。管理職の教師たち  
の信頼と懐の深さを思い知ったの  
です。

**校長と自由に話せる雰囲気  
が  
学校を活性化させる**

校長の今も、年数回は授業を行  
います。出張した先生の代理だっ  
たり、1単元を任せてもらったりと授  
業時数はまちまちですが、教材は自  
分で作り、そのために地元の工場を  
見学したり、学校周辺の地図を見  
たりしています。授業は誰でも参観  
できるようにしています。先生方の授  
業づくりに少しでも役立てればとい  
う思いと、校長の指導力を目標に、  
自分の授業に積極的に取り組んでほ  
しいとも思うからです。

学校は校長1人でつくれるもの  
はありません。目指す学校づくりを  
進めていくために、校長の考えを先  
生方が受け止め、意見を言い合える  
状況をつくること、そして、子ども  
たちの「？」と「！」をつくり出せ  
る授業の大切さを伝え、先生方がや  
りたいことに自由に取り組めるよう  
支援することを、これからも大切に  
していきたいと思っています。